資料No. 2

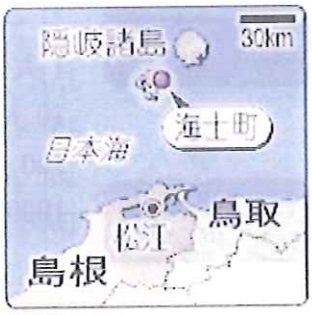
平成 25 年度第 11 回厚田区地域協議会・資料　　平成 26(2014)年 2 月 27 日

住民主体による新たな地域づくり

～地域の将来を見据えた対策について②～

【地域づくりの事例】　島根県隠岐郡海士町の紹介

歴史　後鳥羽上皇が島流しになった場所として有名
人口　1970 年　約 4300 人　⇒減少⇒　2010 年　約 2400 人
就業人口の割合　第1次産業　18%　第2次産業　20%　第3次産業　62%
ゲゲゲの鬼太郎の町・境港からフェリーで 4 時間
現在 200 名の移住者、地域づくりに成功した町
数年前は、夕張のように財政再建の対象になる寸前
町長の給与 50%カット、職員給与 30～40%カット
自立化のために「公共事業をやめよう！」と決断
地域資源やブランド化に投資



現在のブランドとして都市圏で売れているもの

岩牡蠣「春香」

隠岐牛

海士乃塩

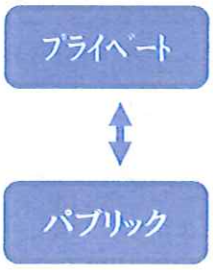
海産物は CAS システムという組織を壊さない特殊な冷凍技術の導入
隠岐牛は地元の建設会社がブランド化に成功
数人の移住者が中心となって高校生に対する教育プロジェクトを実施

“島まるごと学校”という発想
“一人ひとりが主役になれる学校”
生徒数は 90 名
地域創造コース⇒地元で仕事を創る
地域起業家を育てる
特別進学コース⇒公営塾という進学塾

特にこども議会はすごい！
中学生が話し合って結論に達した内容に対して、町が予算をつける
“提案の 6 割が実施されている！”というのもすごい！

何故ここまでできるのか？
答えは、みんなで町をどうするかを話し合う！
話合いのテキストは「海士町の未来をつくる 24 の提案」
“覚悟（腹）を決めて皆で実行する、それ以外に特効薬はない”と住民は語る

【海士町をつくる 24 の提案（住民提案集）】中身の紹介



1 人　まずは、わたしができること
10 人　友達や家族とできること
100 人　学校や産業界ができること
1000 人　地域や行政とできること

【提案をかたちにするために】

1 海士町をつくる 24 の提案（別冊）の説明会を開催します
　各地域で役場の担当者と「未来をつくる会」メンバーが具体的説明を行います
2 別冊から「ひとりでできること」の中から自分の興味のある活動を始めます
　家族や友達と話題にしてください
3 役場担当者が提案者とともに実施計画を作成し、予算を申請します
　予算がついたものから具体的な活動を住民へ説明し、参加者を募集します
4 興味ある提案があったら、担当者が催す会合に参加します
5 提案を実際に動かすためには、どんなことをしなくてはならないかを考えます
　支援する組織や相談できる人に会って、具体的な活動に入ります

【アイデアをかたちにする 5 つのステップ】

1 できない理由探しをせず、できるための条件探しをしましょう
2 「できることからはじめよう」から「できることを広げよう」へ
3 「～しなければならない」ではなく「～しよう」型の活動をしましょう
4 白黒つけることが目的ではない
5 みんなに喜ばれる活動をつくりだそう

1. コミュニティ・デザイン

施設・設備を前提

コミュニティ政策型 行政＋専門家

60 年代～70 年代：ニュータウンなどの住宅地デザイン
ハード整備によるコミュニティの再建

住民参加型 行政＋専門家 一部の住民

80 年代：コミュニティによる施設のデザイン
計画に参加（ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ）、完成後解散

ハードを前提としない住民参加型

2000 年～：まちづくりワークショップ
価値観の変化「豊かさとは何か？」
例えば“利用者が減った施設”を楽しい場所に変えよう！
幸福の定義が変われば、地域は変わる！　人がつながる！

コミュニティ・デザインとは
地域課題をみんなで楽しく解決するために
人々がつながる仕組みをつくること

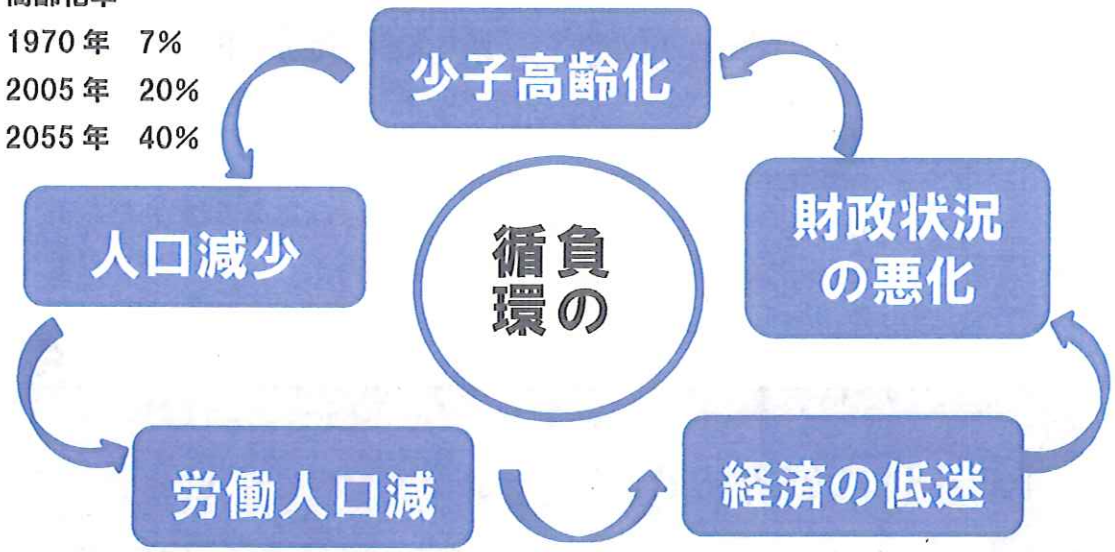
↓

誰が、どのようにして仕組みをつくるのか？

2. 変化する社会構造

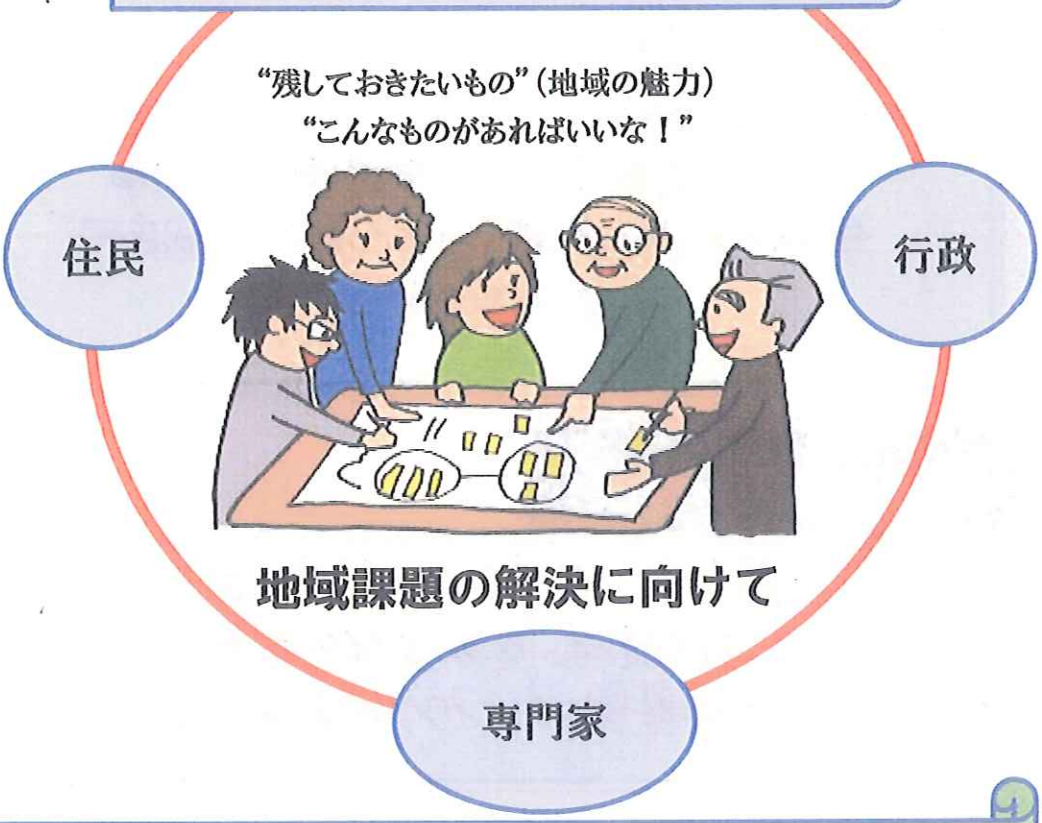
大量生産・大量消費・大量廃棄

高齢化率
1970年　7%
2005年　20%
2055年　40%



価値観の変化

3. 地域づくりワークショップ



地域おこしの鍵（コンセプト）は？
都市では手に入らないものを提供
ないものねだりはしない！

豊かな自然と美しい里山の風景を提供

新鮮で安心・安全な食材の提供

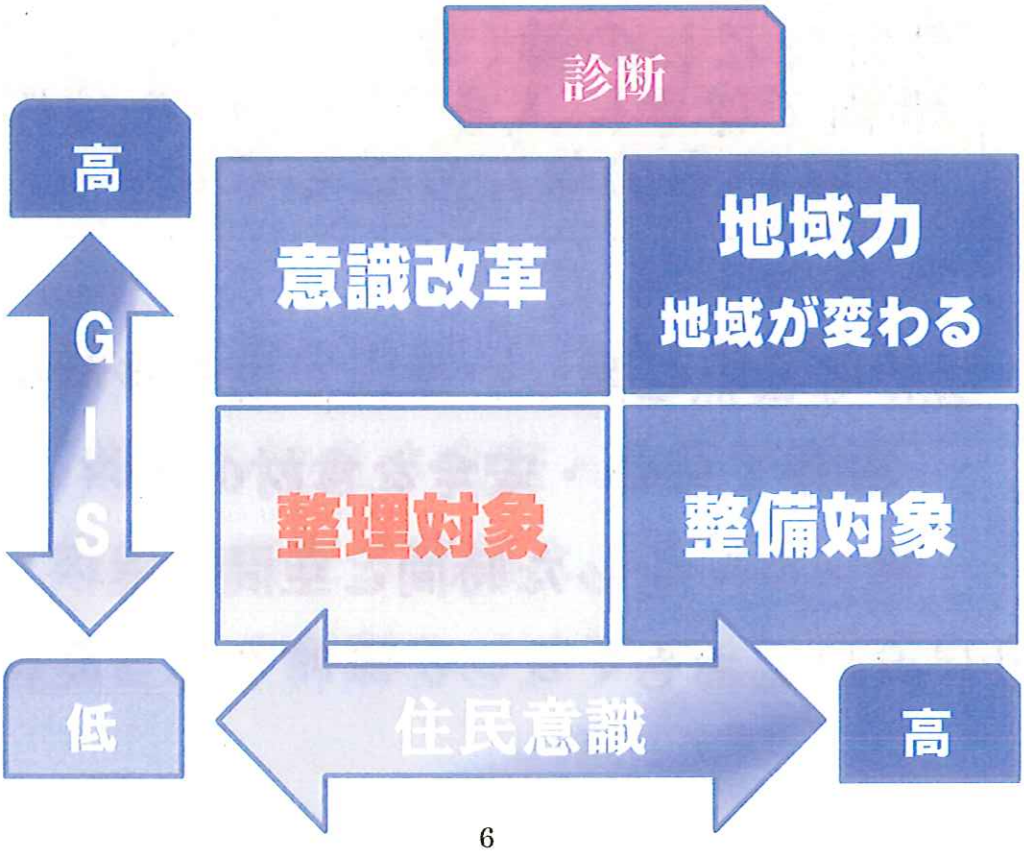
ゆったりとした時間と空間の提供

助け合いとおもてなしの精神をもった住民

4. 集落を診断する基準

GISによる基準

人口、高齢化率、病院の有無と距離
学校の有無と距離、子ども数（14歳まで）
公営住宅の数

住民意識による基準

住民生活、地域文化、災害への対応
自然環境、産業基盤の有無、
生活基盤（インフラ）の整備状況